

佐東の文化

No.32



日本画 安東靖子

平成18年10月15日

佐東の文化

No.
32



佐東文化協会

目次

巻頭言

四季のある地に生かされて……横山 猛……………1

特別寄稿

犬養木堂記念館を見て……阿部 正登……………2

続 千人針と私……………岡田 千茶……………4

所感寸言

平和を願いて……………加藤 美雪……………7

老いのたわ言……………吉政 實夫……………8

所感……………江見 英雄……………9

随筆随想

ふれあい……………長家 克子……………11

花つれづれ……………山本 勢津子……………12

おじいさん、おばあさん……………衣笠 隼巳……………13

難病ってなに……………井上 健一……………14

半分この幸せ……………井口 祥子……………15

二人で……………岩本 全子……………16

歴史紀行

わがふるさとの案内……………井上 健一……………19

出雲街道と大還橋……………宿野 喜一……………20

川崎村(現江見)の杜寺と民話……………野村 勝志……………21

短文芸

詩

みまさか音頭 勝英版……………田中 清一……………24

俳句

月下美人……………春名 静山……………25

青田風……………青山 元江……………25

春秋……………坂部 金治……………26

部落の祭……………江見 英雄……………26

春夏秋冬……………山下 照夫……………26

おさな児……………田中 清一……………26

半夏生……………山本 清一……………27

杜若……………山本 清一……………27

土佐路・伊予路を打ちて……………樽井 清江……………27

落椿……………井口 祥子……………27

瓜の味……………井口 祥子……………28

吉野桜……………加藤 美雪……………28

折り折りに……………杉本 幸子……………28

爛漫……………宿野 淑子……………28

遅桜……………遠藤 綾女……………29

春のいざない……………真野 雅子……………29

雪だるま……………高橋 やえ子……………29

どくだみ……………坂井 はつ子……………29

紅梅……………山本 登山……………30

題字

山本 章

| | | |
|---------|-------|----|
| 友へ | 森本久子 | 43 |
| 笑顔 | 鳥形節子 | 43 |
| のとかの里 | 原幸子 | 43 |
| 身のめぐり | 清田三智子 | 43 |
| 折折に | 宿野和穂 | 44 |
| 施設の人達 | 原田順子 | 44 |
| 清しきわが村 | 新免三代 | 45 |
| 幼日のありて | 有元理嘉子 | 45 |
| 母への感謝 | 新田千晶 | 45 |
| 里山の水辺 | 梅本信恵 | 45 |
| 家族 | 福島美智子 | 46 |
| 孫 | 新井和代 | 46 |
| ポスト | 船曳彩 | 46 |
| 雨 | 入矢敏江 | 46 |
| 雪解 | 日下智加枝 | 47 |
| 屋久島 | 浜田くに子 | 47 |
| 八十路を生きて | 加藤保子 | 47 |
| 書写山にて | 角南三津糸 | 47 |
| 鮎に想ふ | 角利津 | 48 |
| 袖子 | 新免初子 | 48 |
| 合はせて笑ふ | 北村和子 | 48 |
| 霧 | 長澤和枝 | 48 |
| 夕ぐれ | 黒石貞子 | 49 |

| | | |
|---------|-------|----|
| 川柳 | 山下照夫 | 31 |
| 内外昨今 | 山下照夫 | 31 |
| 鳥に網を | 江見英雄 | 31 |
| 揃う | 山本千恵 | 31 |
| 顔 | 山本昌子 | 31 |
| 喜寿の温り | 井口秀子 | 32 |
| 涙 | 原幸子 | 32 |
| 夢 | 名部みどり | 32 |
| 花菖蒲 | 山本登山 | 32 |
| 孫 | 名部和子 | 33 |
| 露天風呂 | 春名静山 | 33 |
| 短歌 | | |
| 其を思ひをり | 三木泰葉 | 34 |
| はる | 坂井はつ子 | 34 |
| 大東亜戦争 | 春名静山 | 34 |
| 古書を読む | 江見英雄 | 34 |
| 卒寿の母 | 加百由起子 | 35 |
| 残照 | 江見眞智子 | 35 |
| わたしの今 | 井上智 | 35 |
| 大きな白菜 | 加藤幸子 | 35 |
| わが生きしこと | 黒石登代 | 36 |
| 奥の深さよ | 森本かよ子 | 36 |
| 流れの如く | 末宗千歳 | 36 |

| | | |
|---------|--------|----|
| 双子山 | 加藤郁 | 36 |
| 近年回顧 | 山下照夫 | 37 |
| 偶感 | 加藤芳英 | 37 |
| 痛い、いたい話 | 杉本幸子 | 37 |
| 入院 | 青山元江 | 37 |
| 姿は浮ばず | 横山美恵子 | 38 |
| 農を忘れて | 横山昌子 | 38 |
| 花に貰ふ余生 | 小林増代 | 38 |
| 入院そして退院 | 横山すみ子 | 38 |
| 天翔り行く | 井口秀子 | 39 |
| 梅雨 | 山下三代子 | 39 |
| をりをりに | 佐々木喜恵子 | 40 |
| 悩み | 藤川亜也 | 40 |
| 葱 | 名部みどり | 40 |
| 生きる | 藤本伸子 | 40 |
| 四国の旅 | 名部和子 | 41 |
| 孫 | 荒尾登志糸 | 41 |
| 旅 | 光井房子 | 41 |
| いのち | 内藤慶子 | 41 |
| 老いて尚 | 名部方子 | 42 |
| 子らとともに | 池田保子 | 42 |
| 少し「晴れ」 | 横林富砂子 | 42 |
| 初夏 | 安西苑 | 42 |

| | | |
|----------------------|-------|----|
| 色褪せぬに | 中川富美枝 | 49 |
| 子と棲みをりて | 阿部すみ糸 | 49 |
| 独りの厨 | 徳野富美子 | 49 |
| かごめかごめ | 谷名保美 | 50 |
| 古里の山 | 関内惇 | 50 |
| 作東文化協会会則 | | 51 |
| 平成17年度 作東文化協会事業報告 | | 53 |
| 平成17年度 作東文化協会決算報告 | | 54 |
| 平成18年度 作東文化協会会員・役員名簿 | | 55 |
| 編集後記 | | 66 |

表紙説明
 題「夫婦」洋画
 愛と長寿の里（旧作東町パレンクイン）
 にふさわしいものをもって描きました。
 垂井裕人

〔巻頭言〕 四季のある地に生かされて

会長 横山 猛

私たちの住んでいる地には、山があり川があり田畑があつて、四季折折の姿を見せてくれます。また、風や雨や霧や雪など、四季折折の風情を愉しませてくれます。

考えてみますと、地球上に四季のはっきりしている国は数える程しかありません。その内の日本にあつて、なかでも四季のはっきりしている地、しかも比較的災害の少ない地に住んでいる私たちは、どれほどその恵みを受けていることでしょうか。その御蔭で、私も次のような作品を生み出すことができました。

里山をおほふ雑木木梢ほそく重なりあひつつけぶりあひつつ

わが村の朝のあをさよ田の青さ囲める山のなほ青くして

村山に北風吹き来てもみぢ葉の還りゆくなり産神の地に

夜の闇を沈むるごとくしんしんと雪は降りつぐ生死を超えて

さて、作州出身の書家であり歌人である尾上柴舟は、「自然は良師なり。よく吾人に教訓を垂れ、鞭撻を加へ、神秘を教ふ。之をとりて素となし、之を以て彩となす。天賦の画、ここに於てか成り、真正の詩、これに由てか出づ。」と述べています。私たちも、恵まれた大自然の懐にあつて、それぞれの感性を磨き、それぞれの文化を築きあげてゆこうではありませんか。

乱れきった日本を心豊かな国にするには、これが一番の近道ではないかと思うのです。

特別寄稿

犬養木堂記念館を見て

阿部正登
(岡山市 書家)

犬養木堂記念館を近々友人と見に行く。今回が三度目である。何度行つても銘する処である。場所は市内川入一〇二で拙宅からも近い。内閣総理大臣を務めた県内屈指の人材の一人であり、あまりに知られ過ぎてはいるが、先ず人物論に入る。備中国庭瀬村川入の大庄屋家の生まれ(安政二年四月・父源左衛門、母さかの次男として誕生)、幼名仙次郎。家は儒学者で六歳から漢学(四書五経)を学んだ。明治五年、小田県庁地券局に勤務し、後、慶應義塾に進み、途中退学。文才に長じ、報知新聞や西南戦争に従軍記者として「戦地直報」を送り、名声を博した。明治十二年、岡山県有志が国会開設建白書を元老院に提出したが、これが政治に夢を託す動機となつた。二十五歳の若さで「東海経済新報」を発刊し、統計院書

記官となり、官界に初歩を印した。まもなく退官し、東京府会議員に当選して国内外の政治家の資質を集めた。後、秋田日報主筆となり、その後、第一回衆議院選挙に当選し、いよいよ政界に乗り出した。本県選出議員の雄たるものの一人となり、大隈重信侯と共に敏腕を揮い、立憲国民党の先頭に立ち、「憲政の神様」と称せられた。後に文部大臣・通信大臣等の重責を果たし、政友会総裁となり、とうとう内閣総理大臣として活躍した。最後に例の五・一五事件の時「話せばわかる」の名言を吐き、応じない海軍の凶弾にたおれた(七十八歳)。この話あまりにも有名であり、最後の一期一期の名言は木堂の沈着勇断をあらわし、国民斉しく銘するところである。以上が木堂先生の人物。

今残る記念館は、質素な威厳を供えた木造建築で白壁造りの蔵のような連続建物である。その風情は質実で文墨人らしい政治家の人柄をよくあらわしている。館内の展示室には、勲一等旭日桐花大綬章が燦然と光輝して其の勲徳を彰している。また、中国政界の孫文との交友の資料は民族を越えた親交であったことを知らせてくれる。外に、殊更に銘記の事柄は木堂先生の書道で、これほど書の本筋を学んだ人物は比類がない。日本の政界・経済界・学界等の人々の中で随一の書格であり、帳廉卿に指示された本格書で書家も到底叶うまい。拙宅に「平情以応^{モツ}物^ズ」の扁額を一点掲示している。遺品の中でも一番貴重なものは書作である。遺墨は、多く存在し県内各小学校中学校等に温存され、墨香を放つてその銘文と共に千載光輝を持つ逸品である。なお外にも尺牘（書翰）は実に尊い存在であり、衣食住の事柄やもろもろの事象にも説き及んで一語には話せない。木堂も晩年には妹尾町和田家（小生の妻百代の母の居所）と深い交流があったようである。以上略解して記念館を紹介した。一見に価する文化財の一と自負している。



生花 池田保子

続 千人針と私

岡田 千茶
(朝日新聞岡山柳壇選者)

去年「作東の文化」に、千人針をくれたM子のことを書いた。もう一人同じように私に千人針をくれたK子のこと書かねばなるまい。

私は、昭和十八年三月末から江見町役場に書記として勤めた。道信町長以下、職員は十二人、私は配給係。戦時下の当時、物資は全て統制されていて、衣料は衣料切符、米は米穀通帳による配給。その他、殆どの物資が配給制だった。半年程、配給主任の板垣さんの下で勤めていたが、主任が病気で退職したから十八歳で配給事務を任された。物資が商業組合などを通じて届くから、各集落の所帯、人口によって割り当てる機械的な事務だったから、若造でも勤まったのだと今にして思う。

K子は私とおない年、役場の職員、梅本の小母さんの姪で、小母さん方に下宿して隣町の商業組合に通っていた。仕事の上でも関係があったから、いつの間にか互いに意識するようになった。私は十九歳で徴兵検査を受け、

煙草をのむようになったが、その当時、煙草も配給で数が限られていたから、自由販売の分は売り出し日の早朝、店頭に並んで買う状態だった。何も言わないのにK子は私のために煙草を買ってくれるようになり、私は当然、当てるようになった。ある日、勤務中に煙草がなくなり、仕事中の彼女に電話した。「おばちゃんの家のお鏡の引き出しの中」と電報のような答えが返ってきた。電話機は事務室の真ん中にあり、電話の応答は全職員に筒抜け、よくも厚かましく、あんなことをしたものだ。記憶しているのは多少の後ろめたさがあったからだろ

う。彼女は都会に勤めていたのを何かの都合で退職して帰郷したのだが、帰郷したその日、日直で丁度職員室に居た私の前へ、小母さんを探ねて颯爽と現れた。田舎には珍しい紺のスーツに深紅のネッカチーフの姿に、圧倒される感じがした。それが彼女との初対面だった。

翌年、彼女は役場の近くにあった私の町の商業組合へ転勤してきた。若葉が青葉に変わる頃のこと、昼休みに彼女を誘って、忠魂碑のある小高い丘の広場へ行った。そこまでは済まず、その先の雑木林へ入っていったのは、始めからの予定の行動だったかも知れない。そこで私達は抱き合った。といっても私はぎこちなく抱いて、かすかに唇を合わせるのがやっとだった。休憩時間はまだあった。その時点で戻ればよかったのに、誰に見られたと言うのでもないのに、彼女と別れると私は役場へ戻らず、そのまま自宅へ帰ったのはどうしてだったのだろう。

昭和十九年五月の徴兵検査は甲種合格だったが、その年十一月末、教育召集という召集令状が届いた。入隊までに四日あった。その間の何時何処だったか忘れたが、彼女は月給四十円の時代に五円の饒別と、千人針を「はい」と言って差し出した。いつの間に準備していたのか驚きであったし、彼女の心を見たようで真実嬉しかった。入隊の三日前、事務引き継ぎを済ませた私はK子と一緒に江見神社へ参拝した。無事を祈願するつもりだったと思う。もう夜になっていて冷たい月光が境内に射していた。彼女は「帰ってこられるのを何時迄も待っています。

す。出発の日は辛いから駅へは行かない」と言った。町を発つ日、慣例で近所の人達大勢で江見駅まで送ってくれ、ばんざいの声の中、汽車が動き出した。所が、来ないはずのK子が、待避線に止まっていた貨車の陰に居て、大きな目いっぱい涙を溜め、私を見詰めていた。千人針のお陰か二年後、私は無事台湾から復員した。



写真 山本眞人

取感寸言

感想や批評を文章で表現する

簡単そうで難しい

しかし文章化されることで

新たな感想や批評が生まれる



書道 眞野時夫

平和を願いて

加藤 美雪

私は八十五歳を迎えました。「人生とは旅であり、旅とは人生である」の言葉を噛み締めています。五歳にて両親と共に一家は大阪府茨木市に昭和二十年迄移り住んで、父は教師として職務につき、私が茨木女学校を卒業したのが昭和十四年です。当時、職業婦人は結婚の条件としては余り良くなく、卒業生約二百名中、小学校・中等学校の教師として十五名前後の人が上級学校に進学するだけでした。今思えば職業婦人に成っていた方が良かったのかと思われませんが、同級生の多くは茶花道、和裁、料理、育児科等の学園に入学し、後

輩の人は戦時中で軍需工場や挺身隊として学業の方はそれぞれころではなかった様です。私は住友生命保険会社に入社し、三年間勤務して、昭和十八年、歯科医師の方と結婚式を挙げました。両親と馴れない家風の上、真珠湾攻撃後、戦争は悪化し、防空壕に入ったたり出たり、灯火管制下の生活が続きました。主人は、昭和二十年八月、病魔におかされ玉音のお声も聞けずして八月十九日に亡くなりました。私も止むなく郷里(川北)に帰る事になり、第二の人生が始まりました。私は親戚の復員された方を婿養子に迎え、田・畠・山と毎日

仕事でした。山ではトランジスタラジオを聞き乍ら開墾をし、梨(新世紀)を新植して食料も何不自由なく増産々々で戦争は二度としないと云う平和が訪れました。又、不幸にも主人が三人の子供を残し、昭和四十年に亡くなり、私がいよいよ田植機、バインダー等使用して一町の田はどうやら始末できる様になり、その内三人の子供も大きくなり成人する迄と、一家は土・日曜日は無く働きました。それなのに平和はいつ迄も続かないのか、余り物が自由に有り過ぎ、便利な大型の機械や科学製品等があふれて、金次第と云う生活になり、少子化はすみ、高齢者は増え、これで良いのかと思われる日々がやって来た様に思われます。昔の事を云っては進歩しない様です

が、子供を大切にしようと思っても殺害されたり、又、親が息子に殺害される様な事が起きます。やはり女性の子供を育て、主人に不便をかけぬ様にしっかりと職務についてもらい、金々でパートで勤めるよりも家庭が肝心ではないかと思われる今日此の頃です。私も昨年、大腿骨骨折で大勢の方々の声かけ、助けを受

老いのたわ言

吉 政 實 夫

真か不思議、子供の頃から弱虫で怠け者でつかみどころがないと言われ、自我丸出しの私が、数えて九十才の長寿。生かされ生きのびている今日、友達も少なくなつたが、家族や周りの人から「爺さん爺さん！」

と、大切に親われ、「有難や有難や」の毎日です。戦前の生活に比べて、農業は機械化され、日常生活は電化され、テレビでは地球の裏側まで見ることができるとなつた。食糧は栄養食か

ら美食にかわりつつある現今、社会生活は日毎に暗くなっている。北朝鮮のミサイル問題など世界各地で人命軽視の事件がマスコミをにぎわしている。一般庶民の暮しは苦しめて米本位時代から現金時代になり、父ちゃんは社会の生活戦争にたちおくれじと頑張り、母ちゃんは生活をきり詰めて、子供の教育に頑張り、子供は朝から夜遅くまで、学校や学習塾で勉強、遊ぶ間もなく疲れきっている。ふと、人間って何なんだろう?と考えさせられることがある。吉川英治先生が晩年に書かれた仏教書を読むと、「本願寺は消える。寺は庶民の心の拠り所であったが、宗教行事もすたれ、寺は葬式仏教になり下り、檀家とは細々と関係を結び、以前は説法中心に二三日かけ

ていた法要も二時間で終る。」と嘆かれていた。

人生とは、豊臣秀吉は「なにわのことは夢の夢」と言って死んだ。

徳川家康は「人生とは遠き道を重き荷物を背おいて行き先の定めのない旅人」と説いている。

林美美子は「花の命は短くて苦しきことのみ多かりき」と教えている。

今日、必要なものは、お釈迦様が迷える民衆を救うために残してくれた、抜苦与楽の法仏教ではないか。過去、現在、未来と会者定離、老少不定、生老病死の法を勉強して、生まれがたき人間に命をいただき、阿弥陀様が交わす大願の舟にのせてもらい無量寿国の極楽に行かせてもらいたい。と愚老は願う。

長梅雨が続く上山のぶどう園で、

柄にないたわ言を並べました。

所感

私は先日聴くともなくテレビを聴いていて思ったのですが、国語は母音から、英語は総て子音からはじまる様に話された様に思う。幼き頃より外国語を習わせれば発音等が大変スムーズに習得し得て結構である事を私も知っている。また流暢な外国語で其の所懐を陳ぶれば其の外人等との交渉等に於ても有利に展開するであろうと思う。だが私の思うのは面倒でも国語の力を先につけさすか、或は同時進行型にやって貰いたいと思う。と云う事は外国語偏重ではなしに民族の伝統的な美しい国語

から美しい言葉や人情風俗をしつかり身につけてやって欲しいと思う。私の拙い経験では小学校高学年で教わった英語教育も後刻何程か助かった事やら中等学校に進んでも同じであった。後程私は重砲兵より陸軍少年飛行兵学校に幹部として勤務する事になったが、其の頃は敵性語であると云うので外国語は余り使用しなかった。



随筆随想

おりにふれて

感じたことや

見聞・体験を

なにくれとなく

書き綴る

思いのままに



生花 小林範子

ふれあい

長家 克子

今年も厚生労働省の許可を得て、薬用けしの栽培が出来た。手入れの失敗と天候不順のため、例年の七割位、開花も十日遅れた。撮影、写生に毎年来訪されている方々や、放送局から、開花の日についてのお尋ねの電話を度々いただいた。五月二十一日、白い花が五つ。二十五日、満開となりました。

高橋さんが写生に来られはじめて三十年位。けしとは、一年に一度の出会いだからと、五月二十四日、一日中、写生された。平成十二年展覧会で最上位入賞で、テープカットさせられたと里さん、絵を府中町の役

場に掛けてあると、今年も御主人と来られた。写真同好会の方々と来られる岡山の佐藤さんも二十年前から、今年も立派な作品を送って下さった。

昨年、二度来訪の岡山大学薬学部学生の神原さんが、五月二十八日、岡大薬学部生薬研究室の生徒さん九名を案内して来訪。けし栽培を始めた経緯、昭和三十八年十一月から、栽培していることなど、私の説明を熱心に聴いて下さった。木の下の「どくだみ」を指さしたり、畦に「げんのしょうこ」が生えていると話し合っていた。私がどくだみを花

の咲いている時、切って干して、煎じて飲用することなど話した。鳳仙花の苗ははじめて見たとのこと。「昨年咲いた花の実がはじけて落ちて今年生えたので、澤山苗が出来ているのよ。」大学の薬草園に植えたいと。苗を抜いてあげました。モルヒネについて学習したところだったので、強い葉がこんな美しい花から出来るとは想像していなかったと。満開を過ぎていましたが、けし坊主も出来ていて、薬学部の学生さんには丁度よかったと思います。

六月二日夕方、神原さんが全員の写真と、皆さんのお便りを届けて下さいました。団体全員の方から、お礼のお便りをいただいたのは初めてです。可愛い便箋、封筒に横書で、所感を書いてありました。全員

の写真は小さく、お名前と一致させることが出来ません。お礼状にその事を記して送りました。六月十九日夕方、神原さんが来訪し、先日の方員の写真を拡大して、ひとりひとりに名前を入れてある写真を下さいま

した。拡大された写真の名前と、お便りを照し合わせて、読み返ししました。高齢になり社会奉仕は出来ませんが、けしの開花の一週間、多勢の方々に喜んで見ていただいて、奉仕につながるかと思えます。

花つれづれ

山本 勢津子

六月といえば梅雨の季節。雨の日が多いにもかかわらず、水無月。これは陰暦の異名で現在でいう七月の気候です。炎暑で、水が干上がるの意で、それならと納得がいきます。

雨が降れば降るほど、生き生きと色冴え、その美しさを競っている紫陽花は緑から白、青やピンクにと七変化のたのしみがあります。

遠い昔の思い出であります。奈

良の率川神社で、幼なくて可愛い巫女さん達が、ササユリを手に「ゆりの舞」を奉納。酒樽いっぱいにお供えしてありましたユリを参拝に来られた人々に「災難除けです。」と一本、一本丁寧に手渡され、私も幼な手に、しつかり大切に持ちました。

ゆりの花といえは、まだ江見休所

の山にも、今でも、ささゆりが咲いているのでしょうか。

秋風が吹き、彼岸の季節になりまして、田圃の畦や川土手に彼岸花が集団で咲きます。

昔は、どこのお墓まわりにもたくさん咲いていました。子供心に、この花はお墓に植えるものかな。だから「佛花」とも「幽霊花」とも呼ぶのだと気味悪く、そばに行くのも、いやでした。

ところが、歳を重ねゆく毎に見る彼岸花は、美しくて何か空をみて語っているようです。

「天上に咲く華」「天界の花」と「梵語」に由来した花名があるそうです。「曼珠沙華」と呼ぶことにいたしました。しょう。

日本の国には四季それぞれに美し

「界」の美しい花でもありません。
「凛と立つ真白き蓮に背を正し。」

おじいさん、おばあさん

衣笠集 巳

い花が咲きます。身近にある花は、私共も昔人も愛し、歌にも詠んだ万葉花ばかりだと思えます。花が咲くのを待ったのしみ。咲いたたのしみ。そして散りゆくを強く名残り惜しむ心。やはり日本人の心を魅きつける風情をもっているのでしょうか。年々、老いてゆく自分に気づかされ、あれもこれも今の中にしておかなくてはと思いつながら、何も前には進まず、あせっている今日、この頃でございます。

子供たちや、親しい人に、後々まで「印象に残る言葉」とか、何かを残せたら、人生大満足であります。が。

お盆も近くなりました。蓮の花をじつと見ておりますと、佛さまそのものでありまして一番格高く「天上

先日、ある新聞にこんな寄稿が載っていた。要約すると、一かつて、おじいさん、おばあさんはたくさんいた。我家にもいたし、母の里にもいた。友達の家にもいた。

おしなべて、おじいさん、おばあさんは格好よさとはほど遠い姿であった。

元気で野良仕事をするおじいさんは無精ひげに薄汚い手ぬぐいでほっかむり。

おばあさんは顔は皺だらけで、手もささくれだつていて、腰も曲つて

いた。

そんな、おじいさん、おばあさんが親戚の祭によばれると着物で正装し、孫の手を引いて隣村へ。

そして律儀な型どおりの挨拶をする。

子供にとっては眩しい光景でもあり、おじいさん、おばあさんを通して「人の一生」を自然と身につけた様な気がする。

お父さんやお母さんとも違うもう一つの思考、動作、生き方を感じ、尊敬の念も生まれ、そう簡単に「キ

れる」こともなかった様に思える。

キれるは、つながらないことであり、おじいさん、おばあさんの存在そのものが、家のつなぎ、村のつなぎを自然と教えるものだった。

— 中略 —

現在、中年から老年にかけての方は祖父母への想い出を語りあい、村への想い出を語ることが出来ても、次の代にはもう出来ないのではないか。

「好きな友達だけいれればいい」という子供、「主人の家の墓に入るのはイヤ」という嫁、「今日一日が楽しく過ごせたら結構」という若者—等。

銘々がしがらみをもたず、自由に生きる。

自由主義、個人主義がこれ程、短

期間に徹底した国もめずらしいのではないか。

それはそれで結構だが、本当にそれでいいのだろうか—という内容だった。

私はこの寄稿を読んでいると自分の子供の頃とダブって感銘を覚えた。

高齢化がすすみ、少子化、核家族化がすすんだ現在、おじいさん、おばあさんはいても、教える機会もなければ相手もない。

難病つてなーに

井上健一

皆さんは「難病」という言葉の意味を知っていますか？「言葉は良く聞かぬが、意味までは知らない。」

と言う人のほうが多いのではないのでしょうか？

今年の十月から「自立支援法」が

本格的に稼働します。これは障害者や、難病患者には大変な問題なのです。

なぜ大変なのかについて書いてみます。

難病とは、

①発生の原因が不明なために治療方法が確立されていない病気で、後遺症の恐れのないもの。

②慢性化し、経済的、精神的に負担の大きい疾患。

つまり誰にでも発生する可能性が

半分この幸せ

昔から兄弟が二人いておいしい物が一つしかない場合、お母さんは「半分こしようね。」と一つの物を真

あるという事です。現在百二十一種類の疾患が、難病として原因の究明や治療方法の解明のために研究が行われていきます。この内の四十五種類の疾患は、「特定疾患」として、医療費の一部又は全部の公費負担が受けられます。

但し、海外の治療には一切適用しません。

いつわが身に降りかかるかわからない難病と対策を、もう少し理解してみようではありませんか。

二つに分けて平等に二人に与え、二人共それで満足していた。

井口祥子

私にとって半分ことは、食材を買

いに車で夫と共に店に行くと、大抵安くておいしそうなパン一こと飲み物一本を必ず買うことにしている。そして、帰り道、その一個のパンを半分こして二人でむしゃむしゃ食べる。

「おいしいね、いい加減な味ね。」といただく喜びはこの上ないものである。

そして、一本の飲み物を、これも少しずつ二人で喉をうるおすと、すかっとして何とも言えない良い味で疲れが吹き飛んでいく。そんな時、幸せだなあと思う。

これに似た事は、時には母であったり、子どもであったり、孫であったりする。

いっぱい取れた野菜は、近所の方にあげたくなる。

また、近所の方や知り合いの人に

「お裾分けですよ。」と頂いた時は、とてもうれしい。

苦勞もいっしょである。

一人でえらいなあ、困ったなあと思っている時、夫がちよつと難事に手を貸してくれたら

「ああ、よかった。」

「助かった。」と、ほっとする。

作物を育てる時でも、畑を機械でよく耕してくれるので

「今度は、あれを蒔こう。これも蒔こう。」と意欲が次から次へ湧いてくる。

蒔く時には、畝巾を広くとり、機械で土寄せをしてくれるので、草取りの手間も省けている。

農業は、一人ではなかなかできない。

しんどさを半分にしてもらって、

やっここなせていく。

自分の引き受けた役でも、同じ役の人達がよく協力して下さるから、やっこ務が果せるんだなあと感じる。

二人で

十月二十一日、この日は忘れません。四年前、主人が脑梗塞で倒れて入院した日です。昨日まで元気一ぱい農作業に精を出していたのに：早朝「手がしびれる、手がしびれる」

と普段とは違った口調で悲鳴にも似た語調で私を呼びました。

いよいよ到来かな？と自分の耳を疑いました。もう二十五年前から糖尿になり治療を続けていたから

気持ちでいっぱいになる。

平素のくらしの中で、喜びも悲しみも半分こにしてもらって幸せだなあと思う。

岩本全子

す。合併症ではとすぐ津山の病院に電話して待機して下さるようお願いし、本家の車で縦貫道を走りぬけ着きましたが、もう全然歩けなくなりました。早く処置して下さったので足と手が悪く、脳は大丈夫でした。その日から毎日先生方の心こもった治療が始まり主人と二人で病気に打ち向っていきました。困った時、いつも両親に手を合わせてお願いして

わがふるさとの案内

井上 健一

去る六月二十四日、多くの人達が、わが故郷を訪れた。旧作東町の歴史愛好家の人たちだった。このメンバーの中に私の知り合いの方がいて案内を頼まれたのだった。

私は歴史は好きだが、詳しくはない。だから調べる。

まず伝説と、史跡が一致するかどうかだ。

次に文書を調べる。しかし、沢山有る文書を鵜呑みにはできない。

そして推理する。後にも推理と一致する証拠を発見した時の喜びは格別である。

このような理由で、数年前にこの

地域に関する文書を作った。この文書を抜き出して今回の資料を作った。

まず簡単に説明し、現地調査に行った。

このところ忙しくて、事前の下見を怠った為、草や、木に隠れた史跡もあり、迷惑を掛けた。既に朽ち果ててしまった祠や、地名から判断しなければならぬような場所も有る。

ここでは祠や神社に関する物を紹介する。

まず寺屋敷の地名のある場所には、寺が有ったと考えてもよいだろう。

更に寺の特徴を現す樹木や、石碑などから推測すると、数箇所の寺があったと考えられる。

この推測を確認するために昔の庄屋を訪ねたが、古文書は既に焼却されていた。

次にお宮に関する地名などを探してみた。

東西南北の、山にお宮に関する地名が有る。時代は異なるかもしれないが、少なくとも四箇所以上のお宮があったようだ。

更に数多くの祠もあった。

あわしま様は婦人病に効き目があるとされ、おしめ様は皮膚病に効くと言う事で他の地域からの参拝者も多かったそうだ。

なぜか神仏に関する伝説の多いわが故郷である。

出雲街道と大還橋

宿野 喜一

今在家から江見の街へ渡る「当時の橋は、現在の位置より下流に架かっていたものと思われる」(山田美那子「文久二年の絵図とともに歩く出雲街道旅日記」とか、「近世初期には旧大還橋の更に下手が渡し場であったといわれる」(岡山県文化財保護協会「出雲往来」と言うようなことが公刊された書物に書かれています。これらは根拠なき話であり、最近、出雲街道の調査にきた人々に対し、不正確で曖昧な説明がこのような記事を生む原因ではないかと思えます。出雲街道を今在家地内でたどれば、道は丸尾から国道を越えて、

南東へ斜めに入る。家並みを外れたところに地藏堂があって、そのすぐ先で天王谷川と井溝が交差する。天王谷川に沿って右へ行く道は吉野川土手に出るが、この道を出雲街道と説明したのではないのでしょうか。この道は牛がやと通れる水車小屋へ行く道で、それから下手には道はありません。昭和五十年代の改修で今のようになったのです。そのあたりは草っ原で今在家の子供らのよい遊び場でした。前述の村はずれの地藏堂は地元では茶堂様と呼び、堂の脇には「永代毎年接待」と刻んだ石塔がある。堂の周辺は旅人達の憩いの

場でもあったのでしよう。本来の出雲街道は茶道様から天王谷川を渡り、真っ直ぐに進んで今は民家の庭先に入り、その先は鉄道で遮られて消滅しています。線路の向こう側にわずかに道の端の草むらを残しているが、また左にカーブして線路敷きになっている。そして現在の鉄道の踏切の所から川土手を下って川岸に出るといいう道筋が出雲道の本道です。

出雲街道に架かる橋は冬期だけの土橋で随分低く、板橋だったこともあると聞いています。旧大還橋東詰に原の井溝があり、江見の町並みの北側に排水路があって、その水は今も昔変わらず原井溝へ注いでいます。その高さが、旧道の、したがって土橋の高さでしょう。明治二十七

年から同三十年までかかって県境万の札まで新道（現一七九号線）が出来たのですが、この道の建設過程で江見川の橋も太い杉材を使用し、川幅四十五間、橋脚五か所、欄干を取り付けた当時としては永久橋とも言える橋が出来たのです。このとき橋

川崎村（現江見）

江見が江見庄川崎村であった頃の文献と言えい伝えによると、社寺堂祠石仏碑宝篋印塔など数多くあった。現存するもの普門寺報恩寺は、もちろんの事、北向地藏・柀地藏・愛宕権現など他に多くある（作東の石造物参照）。そのほか大歳社が竹藪の中で知る人もなく崩れるままにひつ

の名を大還橋と命名したと聞いています。

「文久二年の絵図と共に歩く」出雲街道旅日記の作者達は、絵図と共に歩いたのに何故江見川の土橋を蔑ろにしたのでしょうか。

の社寺と民話

野村勝志

そりと鎮まっていた。現存しないものに稲荷社、恵比寿社、毘沙門社、江見大明神社、荒神本社、荒神小三社（川・田んぼ中・荒神谷）観音堂、本尊は、お寺に祀られている。神社統制で明治四十四年十二月二日、旧江見村（吉田以北を除く）の社の神々は八幡社へ合祀されて村社江見

神社と称し、氏神として祀られるようになった。特に興味深かったのは文献に打越山懺悔寺、古は日指山西登山口にありて、不浄徒之より入る事能わず為に懺悔寺と称す。後年日蓮宗となり讚華寺と称す。庵主の墓あり正徳二年六十四才寂享保三年六月十九日建碑とある。

懺悔寺は王道（大札）の池西側の所にあり大きな碑があった。碑は今は行方知れず。道路と市有地になっている。讚華寺古跡は江見神社北隣山麓に墓碑共にある。讚華庵記の碑文の一部に「釈逸円日勝、京城明覚寺より帰郷し境内に古跡讚華寺あり、幽屋を建て讚華庵と号す」と。碑文は安東靖雄先生に解説していただいた。長文のため省略する。私の子供の頃、庵屋敷と呼んでいた。今

は果樹園を経て竹藪になっている。

因みに東登山口は山城にあつて興北山懺悔寺の古跡あり観音様が祀られている。以上、ありし頃の所在地を調べ、地図の上に印記した。

「神仏の故きところを温ぬれば神は誘い祖先は導く」

大半は判明したが原形をとどめず、学校、姫新線、高速道路、国道、一般道路、畑、山林、藪等になっていた。昔、村人が豊作を祈り、幸せを願ったところであり、感慨一入であった。

さて、民話も数多くあったが、次に一つ紹介します。

昔、源次郎と言う話術の上手い人がいた。人呼んで嘘吐源次と言った。源次が王道の池へ鴨打ちにと未明に起き出て見れば空は早々雨模様、鉄

砲かついで小谷を上がれば雨はしほしほ震動雷電（大風大雨）。少田平へさしかかると一匹の狼が両脇にいて躍びかかるをなぐり殺し、土手に上つて鴨をめぐけて一発、五羽打落し、流れ弾猪に当り、あばれて山芋を掘り、はずみの源次はざぶんと池の中。はい上がれば皮袴に鯉鮒鰻がどっさり入った。それ等をかつき帰り、風呂を沸かさせ、ふんどしぬげば、どじょうが湯桶に一杯、獲物は

狼、猪、鴨五羽、魚はしめて三貫目、それに山芋二貫目、ばあさんや、お前も行ったれば、もつと取れたにと言ったそう。又或る日のこと、筏に下肥積んで王來の元から藤生へ肥たごかつぎ担いがけ、前をかけた後ろをかけようとしたが、たごはない。見れば筏の上。理に合わないことを本当の様に思わせた。私も子供の頃よく聞いて腹を抱え笑ったあの頃を懐かしく思う。



石黒書道 子は石黒書道

短文藝

生きている
あかしとしての
自分の思いを
自分の言葉で
表現する
その表現が
万人の魂を
ゆり動かす
短文芸の力
伝統文化の力



写真 安田 隆

詩

みまさか音頭 勝英版

田中清一

《みんな 歌やあ 踊りんさるかな(独唱)
「あやもない」「らっしもない」せえでも ええでな
*みんな 歌やあ 踊りんさるかな(あエエデな)
美作音頭で 美酒音頭で えー 恵比須顔(デーマンシ)
(あエエデな・エエデな・ソリヤあ・エエデな)
*わしや さがしい 深山を越えてな(あエエデな)
逢うて抱きたい 逢うて抱きたい えー 双子山
(あエエデな・エエデな・ソリヤあ・エエデな)
*そりや 船頭じやって 川舟降りりやな(あエエデな)
今宵偲ぶか こよいしのぶか えー 蔵屋敷
(あエエデな・エエデな・ソリヤあ・エエデな)
*ごっつい 男じやって さぎ湯で磨きやな(あエエデな)
美作美人と みまさか美人と えー ゆらぎ橋
(あエエデな・エエデな・ソリヤあ・エエデな)

*わたしや 日名倉 寄り添う妻でな(あエエデな)
男伊達なら 男だてなら えー 後山

(あエエデな・エエデな・ソリヤあ・エエデな)

*こかあ 鎌坂 武蔵も越えてな(あエエデな)
残すお通と のこすお通と えー 竹山城

(あエエデな・エエデな・ソリヤあ・エエデな)

*むかしや 杉坂 後醍醐帝のな(あエエデな)
隠岐に流され 隠岐に流され えー 出雲街道

(あエエデな・エエデな・ソリヤあ・エエデな)

*彫る木や お盆にな 楮はさつにな(あエエデな)
貯めて貯う 貯めてまかなう えー 久賀のダム

(あエエデな・エエデな・ソリヤあ・エエデな)

*朝日あ 大芦 夕映えもみじやな(あエエデな)
夜は乱れて よるは乱れて えー 舞う蛭

(あエエデな・エエデな・ソリヤあ・エエデな)

*でえらい 綺麗じやで 白無垢着せてな(あエエデな)
三人娘か 三人むすめか えー 那岐の山

(あエエデな・エエデな・ソリヤあ・エエデな)

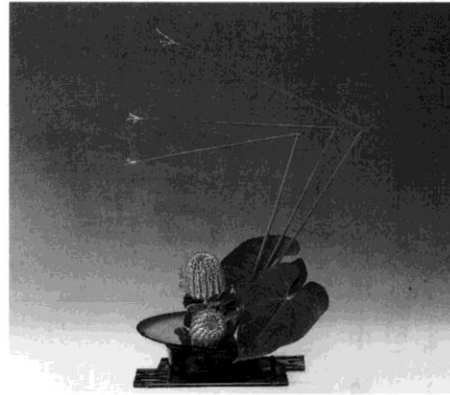
*強さあ 金時 やさしさあ ほたるな(あエエデな)
共にのびゆく とともに伸びゆく えー 新企業

(あエエデな・エエデな・ソリヤあ・エエデな)

*生まれや 若杉 岩肌水でな(あエエデな)
夢は瀬戸へと 夢は瀬戸へと えー 吉野川

(あエエデな・エエデな・ソリヤあ・エエデな)

俳句



生花 大倉 淑子

月下美人

春名 静山

月下美人女あるじ主の理髮店
本流へ還りゆくなり落し水
ちゃん付けの翁媪の日向ぼこ
試作稲一穂に三百五十粒
みどり児の茅の輪潜りて祓はるる

青田風

青山 元江

久々の野良着に優し風薫る
青嵐看取りの窓を叩き過ぎ
片陰に寄り添う人の背の丸さ
青田風黄金の波や峡静か
町に住む曾孫は柿見てモモモト

春秋

坂部 金治

春雨や黒ずむ腕に尚注射
町は市に合併の村風薫る
園児来て賑ふ畑や茄子の花
秋日和雲が迎ふる山登り
踏む石段護国の宮に秋深し

春夏秋冬

山下 照夫

春の陽や夕映え眩しインタ―哉
水涸れて荒田に灌ぐ蟬時雨
野分け来て倒れし枝にトマト三つ
イナバウア世界を湧かせ冬去りぬ
叔母逝きて震え止らぬ寒さ哉

部落の祭

江見 英雄

火の神を祀る村人声揃へ
祝詞には勇み大事と説きにけり
上山に響く太鼓や稲荷祭
積み上げし石に驚く鬼の城
晋作の練兵のあと石城山いはきやま(周防)

おさな児

田中 清一

渋ぬきのすべをも知らで椎ひろふ
茅花囁む児は何処へやら風流る
手に苺いじめられっ子いじめっ子
おさな児か番傘あるく茨みち
水溜り足あげてくる梅雨の雨

半夏生

山本 緑

雪雲の水面を動く山の池
古い諾ひ抱き合ふ春のクラス会
重ね着を一枚脱いでティータイム
花に満つ峠越え来し一軒屋
半夏生やつと見つかる探し物

土佐路・伊予路を打ちて

春名 波留夫

山を割る読経の響き秋遍路
初時雨龍馬越えしやこの峠
遍路ゆく鈴に聞き耳茄子の花
梅雨の雨納経帳へ一ひと雫しずく
夏遍路仁王前にて握り食む

杜若

樽井清江

草萌ゆる雨に力をもらいきて
友を呼ぶ小鳥の声や春野行く
初蝶をじつと目で追う野菜畑
静々と落花を乗せて水流る
楚々として水に影さす杜若

落椿

井口祥子

閑静の大日堂に落椿
六畳のひと間まかりきり雛の段
けもの道たどれば新樹天に伸び
新調の我が衣しつとり五月雨さみるる
我が肩をほぐして渡る青田風

瓜の味

井口秀子

一つずつ夢の叶いて水ぬるむ
小豆選る音さらさらと夜長かな
寒厳し棺の上の千羽鶴
遠花火貴方も空を見てますか
汗水の結晶五臓に瓜の味

折り折りに

杉本幸子(土居)

小春日や久しき人に出逢いたり
年ごとに賀状の減りし寂しさや
陽だまりの井戸端会議春隣り
風そよぐ青田を掠めつばめ飛ぶ
遠花火なぜか侘しき独り居て

吉野桜

加藤美雪

あ、こうと言ひ乍ら雛落ちつけり
豌豆の竹にさばりて藁さげる
土の中落せし種も春を知り
テレビにて吉野桜を眺められ
新築の屋根高く舞う鯉幟

爛漫

宿野淑子

早春の宙に舞ふ王ジャパン
わびすけの花咲き春近し
エンジンの響きにあはせ桜散る
春風にゆれる水仙友迎へ
花に頬甘い香りのラベンダー

遅桜

遠藤綾女

展望台立てば尻込み風光る
色は青名は御衣ぎ香かうや遅桜
一休み桜味なる氷菓食む
千光寺春の一句を投句箱
葉ざくらやパン工房に足が向き

春のいざない

真野雅子

しゃがみ見る幼の目線福寿草
梅の香を混ぜて風吹く夫の墓
初蝶のもつれおうたる昼さがり
囀りが枝をふるわせ花揺れる
続く山重なる山の新樹萌え

雪だるま

高橋やえ子

さらさらと風に振り子の麦の秋
牡丹剪る手に躊躇いの少しあり
ひまわりに誘われついでと途中下車
雨やんで山法師の花揺れ揺れて
ぶややんと雨に拗ねてる雪だるま

どくだみ

坂井はつ子

藪草や倉の裏手に清すがと
夏桑がぎとぎと茂る過疎の村
竹の皮一間ほどへ立てかけて
花とべら花くちなしの垣長し
見の限り茅花呆けし土手をゆく

紅梅

山本登山

大声は母に呼びかく盆の墓
野分雲足の素早き農夫なり
雪霏霏と峽に人影失せにけり
春めくや軒端に鍬の光りあり
紅梅の一鉢愛でて僧去りぬ



川柳



洋画 井口 亘

内外昨今

山下照夫

親は子を子は親殺す生き地獄
雀さえ燕に餌を運ぶのに
憲法を知るや知らずやイラク行き
大地震自然の脅威まざまざと
国技とて外人力士肩で風

烏に網を

江見英雄

烏来る西瓜守りて網を張る
いたわりの声聴く度に老を知る
つらくとも耐えて生きなん吾^{われ}独^{ひとり}居
亡き父の二倍を生きて辱^{はじ}多く
介護など受ける気はなくバイク乗る

揃う

山本千恵

不揃いのりんごの気持よくわかる
咲き揃うかわいい姿七五三
湯の宿の花が揃うて味もさえ
幸運も金運揃えば神いらぬ
人生のひとこま同窓皆揃う

顔

山本昌子

美人ではないけど気立優しい嫁
泣き寝入りした子の頬に口づけし
ほめられて頬のゆるみに寒い風
仕舞風呂やつと素顔の午後十時
高慢な姑^{はは}も仏の顔で逝き

喜寿の温り

井口秀子

握手して喜寿の温りたしかなり
初詣たった五円で無心する
振興券喜怒哀楽で終りたり
子は育つほめて叱って抱きしめて
たんす貯金出番はまだか欠伸する

夢

名部みどり

命だけはと誠の気持で神祈り
おばあちゃんにはおばあちゃんの夢行ってみる
青梅には青梅の夢まかせとい
大きすぎる袋が一泊につきまとい
弱きが出て男らしさが消えてゆき

涙

原 幸子

溢れ出る涙は何を語るかと
ネクタイをそつとなおしてあげる仲
石庭の流れる砂の際立ちて
一年生一人だけでも凜として
食べて行く事の大事を思わされ

花菖蒲

山本登山

約束の場所はベンチの色できめ
味噌作る婦唱夫随の八十半ば
のんきでも明日の予定に○が有り
花菖蒲おじぎしそうな女がゆく
弱気でも芯に一本筋があり

孫

名部 和子

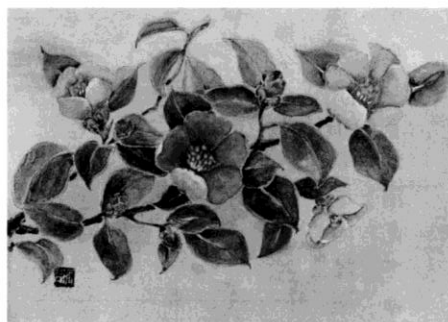
涙こらえ意地をとおした孫四歳
目に力入れてねたふりしてる孫
一人っ子ブランド品で飾りたて
音痴でもねむってくれる子守唄
「もういいかい」かくれてる間にねむった孫

露天風呂

春名 静山

いい湯だな山のお猿も露天風呂
九死に一生賜り八十路の今がある
渡れない老の誤算の溝の幅
あの頃は 大麦飯の 小作農
リストラで電池の切れた古い蛍

短歌



日本画 小林 理智子

其を思ひをり

三木 泰葉

素朴なるふたりにもどる朝ありてひと日ひそかに
其を思ひをり
透析を終へて出で来る夫の身のかなしきまでに葉
臭まとふ
白萩の垂るるを括りくれし夫今日のひと日はそれ
のみにて足る

大東亜戦争

春名 静山

十二月八日の大詔奉戴日廢語となりて若きは知ら
ず
日の丸を降ろし白地に憤激と書きしは二十歳敗戦
知りて
終戦より六十年を緬い継ぎし我が家に傳う神の輪
飾り

はる

坂井 はつ子

丘の上の風車が廻るみんなみの風にゆつたりのつ
たり廻る
かばふがに一年生を中にして一列に戻る陽炎の中

古書を読む

江見 英雄

紀子さまに生れます君は待望の親王にあらせとた
だ祈るなり
光政や津田永忠の遺業をば偲ぶ古書あり今宵また
読む
関東に震災ありて古本を数多送りし事もありけり

轢かれたる獣の姿とどむるなし黄砂の臭ふまがま
がしき朝

卒寿の母

加百 由起子

十回も言つたよとつい口走るしつかり者なりし母
が悲しく
生きゐるを罪のごとくに老い母が亡き人のことを
けふも呟く
学会に帰岡せし兄と落ち合ひて話すは卒寿の母の
行く末

残照

江見 眞智子

思ひ切り畔草刈れば身のほてり静まらざりけり床
につきても
その昔われが鼓舞せし日が沈む休耕田の薄の向う
を
見はるかす青田の面に残照のかすかにありて峽の
閉ざさる

わたしの今

井上 智

旧姓で呼ばれる声にふりむけば「おかあさんによ
く似てきて」と故郷の人
一言に腹たてるわれに「わかるよ」と水仙の花は
ささやきくれぬ
あつたことしたこと思ひ出でずしてさらさらとゆ
かぬわが書く日記

大き白菜

加藤 幸子

くるくると首を回せるペンギンに別の一羽が嘴つ
きはす
祭り御輿が軽トラックに載せられて刈田のほとり
をゆるゆる行けり
はればれと大き白菜出しゐるに客は小さきを選び
て買ふなり

わが生きしこと

黒石 登代

国敗れしを泳げる友に告げむとて駆けし河原の石
熱かりき
国敗るるも竹の枯るるもわれは見き疑ひなきはわ
が生きしこと
シニアライフと洒落て言ひては裏切らぬ土を相手
に今日も励めり

流れの如く

末宗 千歳

栗の花甘く匂へるトンネルをくぐればにはかに朝
光するどし
やうやくに歩みし曾孫は店先の靴をばせつせと並
べてをりぬ
欠詠の続きし二か月の龍誌をばむさぼり読みをり
文字のかすむまで

奥の深さよ

森本 かよ子

小鉢ながら紅白巧みに咲き分くるさつきの芸の奥
の深さよ
わが巣よと帰り来し燕のかげも無し道路工事の音
のみ高く
「淡路島かよふ千鳥」と百人一首指折りてよむ眠
れぬ夜を

双子山

加藤 郁

双子山の峰の土俵に猪の足跡あまたぞ相撲とりし
や
峰の上のさくら咲くとき神のまへ相撲なす子ら里
より消えて
双子山の峰のはざまの土俵にて相撲とる子ら神も
待つらむ

近年回顧

山下照夫

年変り氷雪の舞う松の内逝き急ぐ叔母姉の跡追う
合併し過疎に拍車か爛漫の桜淋しやはらはらと散
り
隣国のミサイル基地を叩くべしと叫ぶ政治家戦慄
覚ゆ

痛い、いたい話

杉本幸子(土居)

お互に齡よわを重ね逢えばまた足腰腕の痛い話に
覚えなき花の咲きたり何処どこより飛んで来たるか鳥
の運ぶか
盆みん過ぎて皆あちこち帰りゆき独りになりて胸に風
吹く

偶感

加藤芳英

展示さるる黒曜石の刃の矢じり隠岐・伊豆に求む
海人らの意志よ
金原にて発掘せしタタラ跡焦げて赤赤千四百年経
ても
二十世紀の闇照らす本『マオ』上下、スターリン
・毛・金の「侵略」も記す

入院

青山元江

病床の夫を見舞えばウトウトと何処へ失せたの亭
主関白
てきばきと夫のお襦袢を替えて去る看護師さんに
ただ手を合わす
あれこれと夕餉の菜をしつらえて車中の人ぞ嫁の
気遣い

姿は浮ばず

横山美恵子

犬のモカ年女とて晴着きて賀状のモデルとすまし
ゐるなり
合格のお礼参りに我はまた次を願ひて五円ごの賽銭
幼くて逝きし長の子の五十回忌成長したる姿は浮
ばず

花に貰ふ余生

小林増代

日を追ひて蘇鉄の新芽が伸びてゆく我の命も伸び
ゆく心地
梅雨となり紫陽花も丁度見頃なり憂さを忘れて楽
しみをりぬ
われ病めど花は健やかに咲きくれぬ数多寄りある
虫にもめげず

農を忘れて

横山昌子

卵の花のほのかに匂ふ山畑を草刈りゆけば時鳥の
鳴く
水湛へ早苗田にはかに広く見ゆ茜に染みし空を映
して
花の友歌の友をと訪ねゆく雨のひと日よ農を忘れ
て

入院そして退院

横山すみ子

点滴注射の雫をかぞふるもどかしさ二時間経てば
終ると言ふに
退院の帰途に買ひ来しすいせんと櫛を先づは夫に
供ふ
仏前に経をあげつつしみじみと共に生き来し五十
年を思ふ

天翔り行く

井口 秀子

早苗持つ娘の背にゆれる赤襷遠くに見えて植田の
眩し

鶴折れど願ひ叶はず逝きし人手向の鶴と天翔り行
く

母の日に孫三姉妹に賜はりし一張羅の服明日は着
ようか

梅雨

山下 三代子

梅雨晴に真紫なる靱草刈り残されし畦道を行く

黒豆を作らむと苗育てしが移植なし得ず雨降り続
きて

雨止みて裏山に今朝鶯は「ホーホケキョ」と啼く
姿は見えねど

をりをりに

佐々木 喜恵子

まろまろと赤きトマトの生りをりぬ遠きよりくる
孫に合はせて

小雪舞ふ庭を眺めつつ手あみしてのたりのたりと
ひと日すぎたり

撫でやればうす目をあける母を見て昔話す足をさ
すりつつ

悩み

藤川 亜也

言ふまいと思ふ心がつい緩み悩みもらして十六夜
の月

悩みごと一日心によぎれどもドンマイドンマイと
眠りに入る

幸せと不幸の境わからねど無事の日を幸せとせ
む

葱

名部 みどり

寒の水に裸にされし白葱は旅の人らに買はれて抱
かれて

引抜いてずるりとむごく皮むけば白葱の肌脈があ
ること

父母の居ましし頃と変りなく千羽の鴉城跡へ還り
来

生きる

藤本 伸子

東雲の輪郭浮かび今日もまた付添ひ始まる一喜一
憂に

事故現場夢なら良いと思ひつつ子の交通事故に怯
えをののく

孫の夢叶へむとするや高き空頬骨固く快闊なる児
の

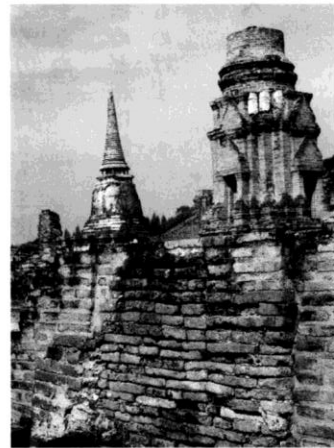


写真 青山時弘

四国の旅

名部 和子

鳴門橋より渦巻く大渦みながらに觀光船の人に手を振る

白き波濤牙むくごとく打ちよせて足摺岬に雨降りしきる

日が沈みそぞろ歩きの道後の町人待顔の人力車あり

孫

荒尾 登志ゑ

晩秋の落葉で滑る山道に孫の手をとりどんぐり捜す

夕暮れを蛩とび交ふ川べりに孫らの歓声空に響くも

縁側で孫娘の作るお手玉よ手先器用にころがり出るや

旅

光井 房子

青き海太平洋の風うけて足摺岬の展望台に立つ

北の大地道南の旅の秋晴に夫婦で立ちしよ千歳空港

函館山眼下にひろがる此の夜景世界三景のネオンに歓声

いのち

内藤 慶子

訃報聞く誰もが通る道なれど明るく生きむやがては来れども

蟬しぐれ夏の終はりをつぐる朝次の命を宿すかその身に

母想ひ早くも過ぎしこの一年その母の墓前に孫相揃ふ

老いて尚

名部 方子

誰が為に植林するや八十路来て檜の苗木を注文する夫

主無き庭の片隅去年よりも勝りて咲きたる古木の桜

子供みこしに去年は泣きぬしかはいい子今年はにつこり笑顔で担ぐ

子らとともに

池田 保子

子どもらの願ひをのせたる短冊が風になびくか粟井の学びや

子どもらとお手玉しやんしやん競ひ合ふ小学生の我にかへりて

図書館に集ひし子らと風車つくりてまはせばひゆるりひゆるひゆる

少し「晴れ」

横林 富砂子

孫娘花柄のゆかたを身につけて笑顔を見せて花火見にゆく

亡き兄の誕生日来て墓参する半世紀すぎし戦時を憶ひつつ

髪のがて孫が短く切つて呉れ鏡に写す顔少し「晴れ」

初夏

安西 苑

初夏の山淡き新葉の奥深く春を惜しんで鳴く鶯よ

田の畔に腰をおろして見上ぐれば果なき空を白き雲流る

悲しみを背負ひて生きる人人に又巡り来し原爆の日ぞ

友へ

森本久子

桜のやうに心優しき友は今天国にても咲け念仏あげん
帰りゆく友の姿は森の中いつもの峠姿消えゆく
まるまると月の昇りし能登香山夕べ優しく風そよぎをり

笑顔

鳥形節子

毎年の父母の日に嫁ごよりおくりものあり幸せ一ぱい
花を見て心優しくさはやかに明るい心に今日の笑顔よ
早起きし体全体のリハビリよ一歩一歩の今日の健康

のとかの里

原幸子

遍路みち一つながりの曼珠沙華くづれし土塀にそひて咲きをり
雪の日日晴るるを待ちてボール打つ今日も競うて老を感じず
黄砂来て山の姿も見えぬほど能登香の里はうす曇りせり

身のめぐり

清田三智子

白鷺は池の中にも飽きたるらし木の天辺に悠然とあり
辛抱して買ひしストーブなかなかの説明書きに気も疲れをり
身のめぐり片付けたいと思へども落葉のやうには掃き捨てがたし

折折に

宿野和穂

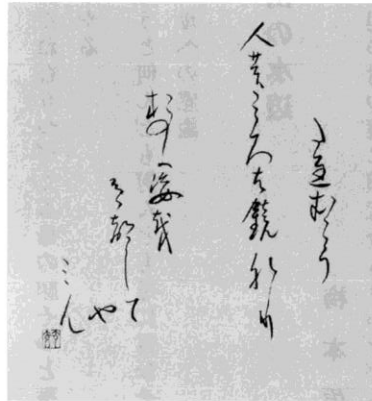
来年の播種の事など話さずに二人黙して小豆を撈る
ジャージーの牛の乳房が揺れてゐて「ヨーデルヨーデル」トランペットの花
シャッターのチャンスを狙ふカメラマン楳の錦の光を浴びて

施設の人達

原田順子

誕生日みんなで祝ふ九十一歳あやかりたりけり美しき老い

九十一歳の媪の誕生祝ひ歌百三歳の媪朗朗と謡ふ
普断より皆を笑はず翁なるに妻子と別るる顔の哀しき



書道 黒石節枝

清しきわが村

新免三代

見わたせば播磨の山並霞めるを日の出の朱は染め
上げてゆく
住み継ぎていと清かなるわが村を無言で襲ふ黄砂
の猛威よ
つばめ二羽今戻ったと小声にて夫あたふたと高窓
作る

幼日のありて

有元 理嘉子

下校時はいたどり生えし山道を友と帰りし幼日の
あり
名も知らぬ黄色き花咲く湿地あり幼き我等の公園
なりき
「馬ぐい」の葉つばの Copp で清水呑むとカバン
投げ出し駆け出す幼ら

母への感謝

新田千晶

今はただねむりつづくる母なれど九十年を直ぐに
生き来し
病みてただねむりつづくる母の顔そつと撫でては
声かけてやる
ありがたうと何んども何んども母に言ひそれでも
たらざる母への感謝

里山の水辺

梅本信恵

山峡の水辺の樹の葉に卵産むもりあをがへるよ森
の妖精
山峡の畑に野猿が出で来たり豌豆ちぎり食ひ荒し
をり
里山に合歓咲きをりて峡の田に夫と二人で小豆蒔
きをり

家族

福島 美智子

赤飯で祝ひし夫の退官は農で生き行く門出でもあ
り
真冬でもビールを飲みつつ鍋かこむ夫と息子のピ
ッチはあがり
帰り来ぬ息子を待ちつつぶちぶちと苺をつぶす小
さなスプーンで

孫

新井和代

「じいじい」と札を指差しいふ幼同じにみゆるか
諭吉も夫も
父ちゃんやぢいぢいばあばあ言へるのに吾れのみ
は「あ」とその母嘆く
「ばあばあ」と声色変へて呼ぶ幼甘えに怒りに誘
ひも示して

ポスト

船曳 彩

やうやくに纏めし歌を夕やみのポストに落してか
るき歩みよ
小雨煙る街灯の光を斜交ひに受けてポストはじつ
と動かず
「手後れかも」と孫は笑ひて下腹の脂肪退治の呼
吸法を言ふ

雨

入矢敏江

真夏日を一変せしめて夕立が立ちのぼらす著き
土の香
身も裡も静まりゆくや寝ころびて眼を閉ぢ聴き
る小雨の音に
雨の日をあてなく走るかなりゆきで所詮独りと言
うてしまつて

雪解

日下 智加枝

曾祖母の膝に遊んだ日は遠く雪解の水の音ののどけさ
雨あとの湿りし土がいつせいに息を吐きをり朝日を浴びて
珈琲カップ両手に囲む温さほどのぬくもり夫が健やかにゐて

屋久島

浜田 くに子

屋久島の観光道路は整備されたやすく行ける「もののけの森」
屋久杉のごつごつと堅き幹に触れ受け入れも拒みもせぬを畏れぬ
ガジュマルに下がりがりて海に飛び込みし夫の遊び場は今も変はらず

八十路を生きて

加藤 保子

昼日中黒い日傘をさして来て死者を見送る人の続きぬ
昨年台風見舞のこの葉書くれたる友も今すでに亡く
戦ひも飢ゑも体験せし老いら八十路を越して巡礼の旅

書写山にて

角南 三津糸

書写山のさかきの若葉青あをと森を洩れくる光を散らす
葉がくれにあまた飛び交ふ鳥たちの声の雫をただにうけをり
古寺の土間はさやかに風通す極楽浄土の余り風とや

鮎に想ふ

角 利津

「四万十産か」と年毎問ひし初鮎よ父よわたしは今焼いてゐます
串を打ち化粧塩して焼く鮎の姿はよろし父より習ひき
父の釣りゐし川瀬は風に光りつつ姿顕たせぬ魚籠を持つわれも

合はせて笑ふ

北村 和子

頭髮も白くなりゆくままにせむわがあるがままに生きむと決めて
我死なば哀れむなけれ泣くなかれ一夜の宴に忘れさるべし
楽しげなる会話の中で難聴の我は笑ひに合はせて笑ふ

柚子

新免 初子

柚子の実の黄に鮮らけく雨露を朝の畑辺に滴らしをり
柚子の木の鋭き刺を縫ふがにも身をよぢりては誘惑に負け獲る
コンクリート打ちの仕事を終へて憩ふ縁たなびく雲に明日を占ふ

霧

長澤 和枝

向う山にうす霧二段にただよひて降りみ降らずみ菜花の黄に
川霧のたゆたふさまよ笑ふがに泣くがに我を論すがにあり
山並をおほひつつみて霧のぼる見あぐる空も霧の色にして

夕ぐれ

黒石貞子

黒雲の低くたれ込む宵の山に合歓のうすべにも眠りに入らむ
向う岸の無花果の葉が風にゆれ扇いでゐるや赤き夕日を
私の持つ鬱など関りなき目高汚れし水に泳ぎてをりぬ

色褪せぬに

中川 富美枝

その色も褪せぬに着ることあらざれば古着として洋服重ねおくなり
再生資源に出すと決めしが惜しみをり天安門にて纏ひしコート
着古したる背広もズボンも片付けぬ野良着の似合ふ夫となりゐて

子と棲みをりて

阿部 すみゑ

合併して更に過疎地となる如し市長の顔も声も知らざる
福祉バスは媪を降ろし代りにと春の日差しを乗せて去りたり
振り込め詐欺の電話の不安なきわれよふかぶか眠るも子と棲みをりて

独りの厨

徳野 富美子

ひとくねりしてみしものの通じぬに厨に独り夕餉の菜を切る
わだかまり一つが消去出来なくてじんだ餅食む腹いっぱい
玉葱がうながす涙に時を得て溢るるままに流るるままに

かごめかごめ

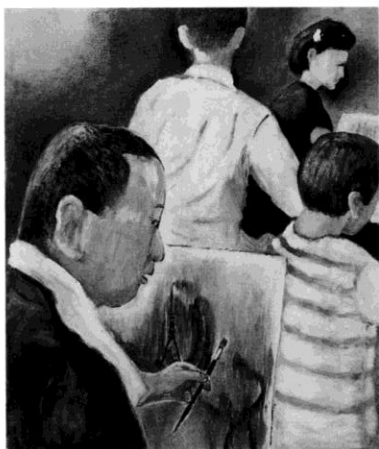
谷名 保美

空目指し飛びたつ螢の灯を一つ沈めて池の果ては常闇
充実のつやめく甘柿灯の下に置けば奏づる冬への序曲
音を吸ひかごめかごめと降る雪のかごめば前後左右がみえず

古里の山

関内 惇

昇りゆく霧に鎖されしまらくを桜は大きき吐息をつくや
山深く来りて青葉の重なりをくぐればさらなる青葉の重なり
抜ん出て峰に立ちゐる老杉のかげ際やかに茜を背負ふ



洋画 鈴木史朗

平成17年度 作東文化協会事業報告

【全体事業】

| 年 | 月 | 日 | 事業名 | 内 容 |
|----|----|----|------------------|-------------------------------------|
| 17 | 3 | 21 | 総会 | バレンタインプラザ |
| | 4 | 19 | 第1回理事会 | 事業計画・「作東の文化」発刊・会員募集について |
| | 4 | 19 | 展示打合せ | 展示会運営等について |
| | 5 | 9 | 専門部役員会 | 専門部事業計画・予算配分等について |
| | 5 | 9 | 第1回編集委員会 | 編集委員長選任・編集方針等について 以降2回開催 |
| | 7 | 1 | 第2回理事会 | 研修旅行・文化誌原稿募集・文化展等について |
| | 7 | 10 | 研修旅行 | 大阪府大阪市 ゴッホ大阪展 |
| | 7 | 12 | 美作市文化連盟設立総会 | 美作市市民センター/美作市文化連盟規約・役員、17年度収支予算について |
| | 9 | 2 | 臨時理事会 | 文化展等について |
| | 10 | 13 | 文化誌31号発刊 | 全会員に配付 |
| | 10 | 28 | 文化展準備会 | 海洋センターにてシート敷き 29日は役員全員と協力者 |
| | 10 | 29 | 文化展 | 海洋センター 30日まで |
| 18 | 1 | 13 | 第3回理事会 | 春の書画写真展等について |
| | 2 | 7 | 勝英2郡美作市文化協会連絡協議会 | 美作市市民センター 今後の方針について |
| | 2 | 26 | 美作市文化講演会 | 美作市文化センター |
| | 3 | 3 | 第4回理事会 | 総会等について |
| | 3 | 25 | 春の書画写真展 | 環境改善センター 26日まで |

【各専門部・支部活動】

| 年 | 月 | 日 | 部 名 | 内 容 |
|----|----|----|-------------------|---|
| 17 | 4 | 2 | 茶華道部(華道) | さくら祭り 華展 バレンタインプラザ 3日まで |
| | 4 | 3 | 茶華道部(茶道) | 観桜茶会 長家邸 |
| | 4 | 3 | 絵手紙教室 | 絵手紙展 ~30日 |
| | 4 | 10 | 棋道部 | 双山囲碁大会 粟井地区センター 以降8月21日 18年1月22日に開催 |
| | 4 | 24 | 絵画部(日本画) | 奈義町立奈義美術観覧・山の駅にて研修会 |
| | 4 | 29 | 園芸部 | 春の山野草寄せ植え・鉢作り講習会 きんちゃい館 |
| | 5 | 2 | 絵画部(洋画部) | 春の作品展 バレンタインプラザ/31日まで |
| | 5 | 6 | 押し絵・ちぎり絵部 | 墨絵・押し絵展 バレンタインプラザ/5日 |
| | 5 | 16 | 粟井支部 | 総会 |
| | 5 | 18 | 土居支部 | 総会(評議員会) |
| | 7 | 1 | 絵画部(洋画部) | プラザサイド展示 ~31日 |
| | 8 | 1 | 写真部 | 写真展示 バレンタインプラザ/29日まで |
| | 8 | 20 | 陶工芸部 | 陶芸教室 圓光窯/~22日 |
| | 9 | 2 | 書道部 | 白雲書道展 バレンタインプラザ/9月4日まで |
| | 9 | 18 | 茶華道部(茶道) | お月見の茶会 江見地区センター |
| | 10 | 8 | 園芸部 | 秋の山野草・木物作り方講習会 きんちゃい館 |
| | 10 | 29 | 写真部 | 撮影会(信濃方面) |
| | 11 | 4 | 文芸部 | 栗の実川柳社(西栗倉)と合同句会 |
| | 11 | 19 | 写真部 | 佐用郡展出品 |
| | 11 | 19 | 吉野支部 | 研修旅行(安土城・考古博物館) |
| | 11 | 20 | 福山支部 | 研修旅行(広島県福山市) |
| 18 | 1 | 13 | 江見支部 | 江見支部理事会 |
| | 3 | 26 | 芸能部 | 作東文化協会芸能部発表会 |
| | | | 絵画部(日本画) | さつき会/第4土曜13:00~ さつき会/第2・4木曜午前9:00~江見地区センター |
| | | | 絵画部(洋画部) | 絵画教室/農村環境改善センター竹中先生 第1・3土 油絵・4土 水彩13:00~17:00 |
| | | | 茶華道部(華道) | 公民館への展示 |
| | | | 文芸部 | 川柳同好会 偶数月第1水曜日例会 14:00~ |
| | | | 歴史部 | 古文書を読む会 毎月第3金曜日 13:30~ 歴史部地名研究教室 毎月第4金曜日 13:00~ |
| | | | 手芸部 | 中央公民館 毎週月曜、毎月第2・第4水曜日 9:00~12:00 |
| | | | 棋道部 | 教室 改善センター和室/毎週水・土12:00より 教室 粟井教育集会所/毎週月 公民館 毎週土曜日 10:00より |
| | | | 情報映像部 | 文化協会HP更新 部会/第3木曜13:30~ パソコンサークル/毎週水曜19:00~ 粟井地区センター |
| | | | 粟井支部 | 役員会 年3~6回 教室(大蔵)・ジャズ・唱歌・パソコン・囲碁・ちぎり絵・和紙・カラオケ・フルーツ・大正琴・和歌・書道・習字・書道・少将寺・貝太鼓 |
| | | | 各専門部 | 愛寿大学趣味の講座:書道 短歌 囲碁 手芸 絵手紙 プラザ両側面へ展示:絵画、書道、写真、文芸、陶芸、絵手紙、墨絵、押し絵、押花絵、ちぎり絵 |
| 17 | 7 | 12 | 美作市文化連盟設立総会 | 美作市市民センター 規約・役員等について |
| 18 | 2 | 7 | 勝英2郡・美作市文化協会連絡協議会 | 美作市市民センター 今後の方針等について |

編集後記

文化誌作成費予算は、昨年比三〇%の減、印刷費をこの範囲でおさめる手段は、ページ数を減ずること、使用する用紙の質を落すこと、写真版を少なくすること等々、編集者にとって最もやりたくないことを強いられることになりました。

しかし「作東の文化」誌こそ、作東文化協会会員の連帯感を造成し、会の歴史の証しだと信ずる私達として苦汁の選択の中に生れた第三十二号だったとご理解ください。

さらに来年度に向けてどうすればよいかを会員諸氏の英知をおよせいただきたいと念じております。

編集委員会

作 東 の 文 化

第 32 号

平成18年10月15日発行

.....

編 集 作東文化協会文化誌編集委員会
(美作市教育委員会 作東分室内)

編集委員 谷口 重人 青山 時弘 安東 靖雄
梅澤 紀之 小坂田 貢 新田 祐之
原 洋一

発行所 作 東 文 化 協 会
岡山県美作市教育委員会 作東分室内
TEL (0868) 75-1111 〒709-4292
HPアドレス <http://bunka.boj.jp/>

印刷所 株式会社 廣 陽 本 社
岡山県津山市田町22

歴史紀行

大きなできごと

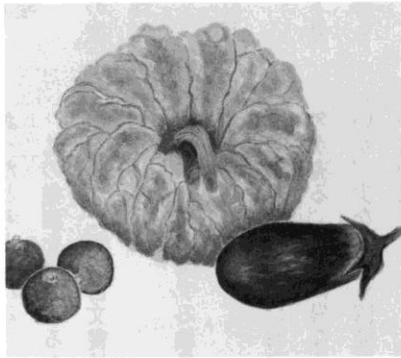
些細な歩み

みな

人間の歴史

かたりべとなつて

伝えよう



日本画 寺師 喜代美

これからも二人で仲良く心静かに暮らしていきたいと思っています。

いました。今回も毎朝の水とお茶をお供えする時、思わず手を合わせて「二日も早く歩けるように」と毎日、朝八時の汽車で病院に行き、これまで忙しい日々で話もゆっくり出来なかつた分までよく語り合つたものです。「ケーキなしのティータイム」窓から観える津山の空、何もかも別世界の様でした。

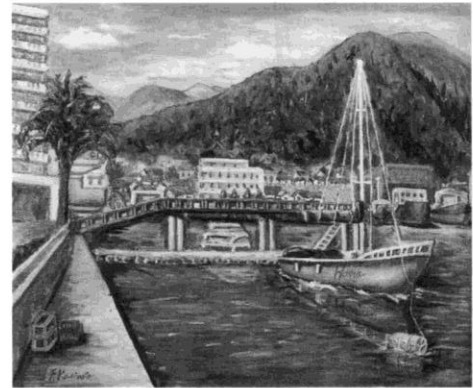
結婚して二人でこんなに語り合えたのも意義があり、私にとって二ヶ月は短いものでした。

連日のリハビリで杖をついて歩けるようになりました。

「よく頑張りましたね」と胸が一ぱいになり、主人の手を握りしめていました。

「歩いた！歩いた！」

本当にありがとう。



洋画 樫本 富貴子